

武蔵野日曜集会 年頭集会

靈言者

——ヨハネ伝第1章1～4節——

1984年1月8日（武蔵野）

小池辰雄

元始に靈言れいげんござる 無始の始 靈言者 神に対面して在った 神性・神格 神相・即像 靈神・
 無相 ロゴス・エトス・パトス 元始にパトスが在った 元始に行為が在った 義・道・愛
 無相の相 万の物これに由りて成る 生命の連関 靈生・靈光 エン・クリスト

【ヨハネ1:1～4】

- 1 太初はじめに言ことあり、言は神ともと偕いっしょにあり、言は神なりき。
- 2 この言は太初はじめに神とともにあり、
- 3 万よろずの物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。
- 4 之これに生命いのちあり、この生命は人の光なりき。

●元始に靈言れいげんござる

このヨハネ伝、ヨハネ福音書は、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書の最後のものです。マタイ伝はキリストの言が非常に整って伝えられている。マルコ伝はキリストの行為、ルカ伝はキリストの心、ヨハネ伝はキリストの霊——どれにも、もちろん霊がかかっていますけれども——特色からいうと、そういうことです。マタイ、マルコ、ルカ伝を共観福音書という。実に不思議ですね、こういうようにできているのは。この三つを総括しているようなのが、このヨハネ伝です。これは一番次元が高い。非常に高次元の世界です。

集会には本当に来てくださいよ。今日は、未だかつておそらく世界中で言われないことを語ります。ヨハネ伝1章1節から4節、どんな註解書にも絶対に書いてない。私は昨日、そのことを示されて非常に驚いた。

1 太初はじめに言ことあり、言は神ともと偕いっしょにあり、言は神なりき。

「太初にロゴス（言）があつた」

という。さて、「ロゴス」というのは何と訳すか。明治6年の頃の聖書の訳には、

「元始はじめに靈言れいげんござる」

と、私が言つたようなことが書いてある。この「靈言れいげんござる」というのは素晴らしい訳です。昔の人の方がやはり非常に霊的だね。私が始めの頃に使っていた聖書には、



「元始に道ありき」

とある。「道」というのは「ことば」とも読めます。漢文では動詞だと、「いう」と読む。漢字というのは素晴らしい。今の訳では「言」となっている。もともと、英語でもドイツ語でも「ロゴス」を「ワード」「ヴォルト」(ことば)と訳している。

●無始の始

ところで、「太初に」とは一体何か。創世記の1章1節に、

「1元始に神天地を創造たまえり。」

とある。神さまは永遠者です。神さまは無始無終なんだ。始めもなければ終わりもない。これを永遠という。神それ自体は窮もなければ終りもない。我々のいわゆる相対的な概念を超えた存在です。神さまはどんな望遠鏡にも出てこない。無始無窮です。だから、「はじめに」というのは、創造したその瞬間を「はじめに」と言うわけだ。

「神、はじめに天地を造りたまえり」

と。神さまは、永遠者が活動して、存在者が動いた。「動く」という字に人篇をつけると「働く」という字になる。そして、天地万物をお造りになった。最後に人間を造られた。そう書いてある。創世記の第1章は非常に神学的な表現です。第2章からは非常に神話的です。創造の話がある。

ところが、ヨハネ伝のは、

「はじめにロゴスが在った」

という。「はじめに在った」とはどういうことか。これは創世記の「はじめ」とちょっと違うんだ。ロゴスは造られていなかった。造られたものではない。はじめから在った。何ですか、その「はじめから」とは。この「はじめ」は、神さまは無始者だけれども、「無始の始」という。こんなことは誰もまだ言わない。始め無き始めということですよ。

●霊言者

「ロゴス」というのは、「言」といったって、「在った」というのだから——言葉というのは表現されるものが言葉でしょ——「言が在った」というのは、一体、「言」なんて訳すのが本当はおかしい。私は「霊言者」と訳した。こんな訳はまだかつて日本にもどこにもない。ロゴスを霊言者と訳す。者がなければ困るんだ、実在者だから。「在った」というんだから。「言が在った」というのは、我々がしゃべっているような言葉が在ったのではない。言葉以前の世界があるんですよ。

だから、無始の始、始め無き始めに、無始なる神さまが在る。無始の始が「ロゴス」です。始め無き始めという実在。それがどういうことかはだんだん分かります。

「元始に」という。「元始」とはいい訳だ。この「元」の字が非常に大事なんだ。漢字は素



晴らしいから、遠慮しないで使った方がいい。どうして、みんな漢字を遠慮するのだろうね、かなにばかりしてしまつてき。そんなのはかなわないよ。漢字というのは世界で最高の文字です。どうも私は時代に逆流する男で困るけれども、しかたがない。何も奇を好んでゐるわけではない。それを本当に一番表してくれるから。明治の頃の本を読むと、みんなかながふつてある。これは「はじめ」と読む、しかしながら、内容はこうだよと。やはり、あのルビというのは必要なんだな、時々。昔は全部、ルビが付いていた。そういう元始、無始の始。これが「元始」です。

●神に対面して在った

「ロゴス」はギリシア語ではいろいろな意味があります。「言」という意味もあるし、「道理」というのが一番合うかもしれない。この「言」が——とにかく今は一応「言」としておきましょう——この「言」が、「靈言者」が「神とともに在った」という。およそ無始の始めから、靈言者が神と共に在った。この「共に」が困るんです。「共に」(プロス)という字は——これはギリシア語をやらないと分からないけれども——二格と三格と四格の使い方がある。この場合は「プロス トン テオン」といって、四格です。四格のときは、「に向かつて」という字なんです。神さまの面前に対して、神に対して、神に向かつて、向かい合つて、ということ。こうやって、皆さんと向かい合っている。これが「プロス」なんです。「向かい合っていました」と。向かい合つて、目と目を合わせているような在り方が本当の「プロス」なんだ。二格だと、「のために」という意味になる。この使い方は少ない。例えば、「プロス ゴーエース」「生命のために」(ルカ11:27)という言葉がある。「生命を与えるために」という意味です。三格の「プロス」はたくさんある。「そのそばに、共に」という意味です。正に、この「共に」の訳はむしろこの三格の方です。英語でもドイツ語でも「バイ」という。そのそばに、その所に、そのもとに」という意味だ。しかし、ここはハッキリ、四格なんだから、「神に向かい合っていました」ということです。

●神性・神格

「元始に靈言者が在った」

「在る」とは「有る」ではないですよ。存在の「在」の方です。「有る無し」の「有」ではない。しかも、

「その靈言者は神に對面して在った」という。

私は今度、ヨハネ伝は全部、自分で訳しますから。もう気が抜けたような訳はごめんだからね、私は自分でもって訳す。



「その靈言者は神性であつた」

この場合の「神」というのは、原文は「テオス」という字ですが、定冠詞がついてない。この場合は、

「神性(ゴットハイト)を持つているものであつた」

ということです。「神性」と書いて、これを「かみ」と読めばいい。神の性質をもったもの。人性ではない。神性です。これを「神格」と言つたつていい。「神格であつた」と。「神格」の方がいい。神格に直しておこう。

「その靈言者は神格であつた」

ということ。やはり、話しているうちに、より良くなるよ。神格にしよう。「神格」と書いて「かみ」と読む。人格という言葉があるから、神格という。

●神相・即像

創世記1章27節に、

「²⁷神其像の如くに人を創造たまえり。」

とある。これは「神の姿の如くに造つた」ではない。「神の相に造つた」です。ヘブライ語の「ツエレム エロヒーム」の「ツエレム」という言い方は、「如く」という訳はいかん。その「姿」も、私は「相」と書く。神相に造つたということです。この「つくる」という字は正に「創造」という字を使っている。2章7節の、

「⁷エホバ神、土の塵を以て人を造り、生氣をその鼻に吹き入れたまえり、人即ち生靈となりぬ。」

「人を土から造つた」と言うときには、この「創造」という字を使つてない。英語の「メイク」という字を使つてある。1章の方は「クリエイト」という字です。

「神の相に人を創造つた」

という。これがゲーテが非常に好きな「エーベンビルト」という言葉なんです。

「本来、我々は神のエーベンビルトである」

ということが『ファウスト』に出てきます。「似姿」の「似」という字は本当はいけない。正に即しているんだ。「エーベンビルト」というのは「即像」なんだ。「似姿」という訳はよくない。似ているのではない。そっくりだということ。

仏教の世界でもそうでしょ。

「天上天下唯我独尊」

という。宇宙の我だけが尊いと。本当に悟れば、梵の我、宇宙の我に即してしまっている世界が本当の世界でしょ。禅宗は結局、その世界をやっているわけです。だから、禅宗では偶像をつくらない。仏像は要らないんだ。

「人間は罪を犯して、罪びとだから、神と質がちがう」



と、バルト神学はあまり切り過ぎてしまった。現実の人間はそんなに割り切れるものではない。大事なものが残ってます。ただ、それが主導になつていないから困るけれども。

それはキリストが贖いとおつてくださったから。私も自分のことを「罪びとの首」だと、こないだ書いたでしょ。けれども、本当の「罪びとの首」はキリスト自身がなつてくださったて、全部贖つてくださった。我々は本来、樂園を失つてしまった。ところが、キリストが樂園を回復してくださったんだから。我々には樂園回復された、信仰における我というものが、神の「エーベンビルト」が来ているわけだ。そうすると本当にありがたくてしようがない。この「エーベンビルト」を、「即像」を無条件に賜っているんだ。即ち、「神相」になっている。キリストによつて神相を賜っているんだ。

●霊神・無相

「神に対面して在った」という。「対して在る」世界は言葉が通ずる世界です。対しないと、言葉が通じない。だから、霊言者というものは神さまに對して、「対して在る」ところの存在なんです。会話がなくなつたら、おしまいなんだ。そして、

「その霊言者は神格であつた」

と。「神」というのは、キリストがヨハネ伝で仰つているとおり、霊神なんだ。「プニューマ」「プネウマ」、「霊」です。霊神であるから、これは分かります。これは無相、相が無い。神さまの相は無い。「神の相に即して」とは、「相」とは一体何ですか。神さまの相は無いではないですか。旧約聖書では、神さまに口があつたり、目があつたり、手があつたり、足があつたり、非常に人間的に表現するけれども、しかし、偶像にしないでしょ。人格的な表現で、人格的に言わざるをえない。しかしながら、これは霊である。

キリストは「父」と仰つていられるけれども、しかし、それは霊神にして父神である。神格と人格が渾然一体であるような何ものかですよ。分からないです、無相なんだから。神さまは無相者なんです。それから、無始無終です。やっぱり、無の神学でしょうが。ただ、これは霊にしている。霊として存在している。

「神さまに對して在った」

という。「在った」というこの過去形は、過去において在つて、現在において在つて、将来においても在る、そういう「在った」ということです。単なる過去ではない。今もそうである。世の終りもそうである。

●ロゴス・エトス・パトス

「ロゴス」というのはギリシア語で、フィロン(BC20年頃〜AC50年頃)の哲学から来ている。大体、ギリシア人の考え方はロゴスが先にたつ。ヨハネはそれを援用して——ヨハネは単なるギリシア的なものではないけれども——それを使つてしまった。ヘブライ語の新約聖



書では、「ダーバール」という字が使つてある。「ダーバール」というのは「事、事柄、言葉」という意味です。

「ロゴス」に対して「エトス」、「パトス」という言葉がある。ロゴスは「これは真なりや、理なりや」という「真」の世界です。エトスは「意」の世界、パトスは「情、心、心情」の世界です。知・情・意、真・善・美という。ロゴスは知・真、エトスは意・善、パトスは情・美の世界です。カントの哲学みたいだね。カントは、真の世界、知の世界で、『純粋理性批判』という大きな本を書いた。それで認識論の土台を築いた。それから、道徳哲学は『実践理性』の世界です。そして、『判断力』の世界は芸術の世界です。カントというのは大したものだ。真善美、知情意という。ギリシア人は知の世界が優れている。だから、哲学が発達する。フィロンという哲学者はそちらの方ですから、その「ロゴス」をもつてきた。これは「理」の世界です。聖書は言葉の、神の言の海です。神の言がとにかく一番権威をもっている。これは「啓示」の言ですから。人間の普通の言葉とは違うんだ。預言者が聞いて、

「神エホバがこれを言いたもう」

と言う。キリストも神さまから言を賜つて、ものを言っていた。そういう意味において、神に対するところの交通は言葉なんだ。だから、表現としては、これが中心になるわけです。けれども、ギリシア人はそうですが、今度はドイツ人になると、

「世界の外にも世界の中にも、これは無条件に善なりというものは善意志の他にはない」

という、カントの有名な言葉がある。この「善意志」です。ドイツ人は道念の世界、意志的な世界が強い。ドイツ人は意志の人間です。理もちろん持っていますよ。ただ、今は特色だけを言っているのであつて、他はないと言っているのではない。

●元始にパトスが在った

それでは、日本人は何かというと、日本人はこのパトスの方なんだ。心の世界、情の世界です。だから、日本の芸術は、美の世界が素晴らしい。大体、食べ物だつて、向こうのとはもうお皿がちがう。非常に美的なんだ。美的感覚でものを食べている。料理を見たつて、そうだ。中国料理はおいしいけれども、あれは美的感覚じゃないよ。美的なのはやっぱり日本なんだ。そして、ものの判断をするとき、情が必ずそこにある。とにかく、日本人の特色はハートの方にある。こころの世界です。美的表現になつてくる。もし、私だったら、

「元始に言あり」

とは言わない。

「元始に心在り」

「元始に靈心者在り」

と言いたい。「何ごとも心次第」というようなことを言うね、日本人は。エトス、道徳の世



界は、

「義^{ただ}しいか、義しくないか」

という「義」の世界だ。ロゴスは

「ちゃんとした理屈になつてゐるか」

という道理、「道」の世界です。パトスは「愛」の世界です。

「元始にパトスが在った」

という。それは結局、

「元始に愛在り」

「元始に靈愛者在り」

あるいは、

「元始に大愛在り」

と言つてもいい。それから、

「元始に大道在り」

「元始に大義在り」

ということ。大道・大義・大愛というものが始めに在った。これは渾然としています。これをロゴスと言おうが、エトスと言おうが、パトスと言おうが、この三つのものは本当は離すことができない。どれが主導であるかというだけのはなしです。ギリシア型はロゴスになる。ゲルマン型はむしろエトスだ。それから、日本型はパトスだ。ギリシア、ゲルマン、ラテンだ。おもしろいね。真善美、知情意、これは全部渾然として、しかもそれは、愛であり、霊である。

「神は愛なり」というでしょ。「キリストは愛なり」でしょ。本当はここが一番大事なところなんだ。これがぬけてゐる。これに気がついた。この事に世界中で誰も気がつかないだろう、

「元始にパトス在り」

なんて。これは日本人ならば、私がヨハネなら、そう言いたい。大体、ヨハネ伝は非常に愛が書いてあるところです。ヨハネが「始めにロゴスあり」なんて、なぜ言いだしたかと言いたいくらいだよ、正直。

●元始に行為が在った

ゲーテが『ファウスト』の劇の中で、ファウストをして言わしめてゐる。

「始めに言（ヴォルト）あり」

ではどうも満足しない。

「始めに思い（ズィン）があつた」

と訳し変えた。まだ、ハッキリしない。それから

「始めに力（クラフト）があつた」



と。だいたいいいなあと。けれども、最後に

「始めに行為(タート)があつた」

と訳しておさまった。道德の世界は行為に関するでしょ。やっぱりドイツ人だね。

「行為は一切である」

という言葉も『ファウスト』の中に出てくる。

「情感(デフュール)は一切なり」

という言葉もあつて、ゲートは両方持つている。私はこれを「体感」と訳す。「体」ということは、全存在で感ずるということです。

それで、「行為」と訳して初めて気がおさまったという。これはそれらをただ否定しているのではない。それではもの足りないということです。結局は全部、ヴォルト(言)であり、ズイン(思い)であり、クラフト(力)であり、タート(行為)であるという、渾然とした気持だとは思いますが、しかし、ゲートはここで特に、その当時のキリスト教が理屈ばかり言っていたり、ただ思つてばかりいたから、キリスト教は行為に発しなければダメなんだということを言いたかつたわけです。

その行為も「ヴォールタート」(善行)で、人に対して善いことをしてあげる、親切にしてあげること。「ヴォールタート」が即ち愛なんです。愛はただ感情ではない。愛はそういう力をもっている。さすがに、ゲートはそういう意味において、「タート」という訳し方をした。やはりドイツ人らしい。感情の方もゲートは非常に豊かな人だから、宗教の本体は情感、体感であるという。

「身体で本当に受けとらないで、何が宗教か」

なんて言うわけだ。あの宗教論のところに書いてある。

●義・道・愛

「タート」(行為)・「ヴォルト」(言)・「クンスト」(芸術)ということ。日本人は芸術の民だ。ドイツ語の「クンスト」という言葉はおもしろい。これは「ケンネン」(できる)という字からきている。芸術と言つたつて、これは「技」、わざなんだ。手をもつてする技なんだ。もともと、ヒポクラテスの医師がこのクンストで、農業もクンストなんだ。書道とか画道だか文学だとかもみんなクンストです。これは心の世界で本当は非常に明るいんです。

心の一番大事なものは愛だから。義・道・愛です。大愛の世界、霊愛の世界です。だから、

「元始にパトス在り。パトスは神に対して在った。パトスは神格であつた」

というわけだ。私はそこまで訳しませんよ。訳しませんが、日本人だつたならば、そう言いたいと申し上げているわけです。そして、この愛というものが実に福音の一番中心なんだから仕方がない。人を助けること、救うことなんだ。キリストは己を棄ててまでも人を愛して、そして我々を救い上げて行つたんですよ。どんなに人にけなされようが、



誤解されようが、迫害されようが、全部それを担ってしまったのがキリストの十字架ではないですか。これはそういう愛ですから。本当はロゴスどころのさわぎではない。だから、

「元始にパトスあり」

というのは、私は本当は真理だと思う。そんな聖書の講義をする者は世界中にいない。日本人が日本人らしく聖書を読んで何が悪い。ルターはドイツ人らしく読んだ。ミルトンはイギリス人らしく。みんなそのらしきというものがある。バラはバラらしく、ランはランらしく、太陽の光を現しているんでしょ。

●無相の相

神さまは無相であるが、キリストは正に無相の相なんです。パウロの書簡を見ます。コロサイ書1章15節に

「¹⁵彼は見得べからざる神の像^{かたち}にして、

とある。神さまは見えない。キリストは見得うべからざる不見の神の像^{かたち}だという。これが正に無相の相だよ。キリストは無相の相、無像の像である。

万^{よろず}の造られし物の先に生れ給える者なり。」(コロサイ1・15)

造られたのではない。「先に」、無始の始、始め無き始めにキリストは無相の相として、今度はこの地上に現れてきた。ナザレのイエスは無相の相だ。この相が本当に受肉したんだ。受肉して我々と同じ人間になった。けれども、その中には神の無相の相があるというわけです。

だから、「一切の徳は満ちた」という。コロサイ書2章9節、

「⁹それ神の満ち足れる徳はことごとく形態^{かたち}をなしてキリストに宿れり。」(コロサイ2・9)

キリストは神格、神性の充満であるという。この「ロゴス」という言葉は、旧約の箴言に出てくる「知恵」(ホクマー)という言葉と相通ずるところがあつて、これは本当の知の世界ですから、本当の知、「ソフィア」です。だから、

「始めにソフィアあり」

というように言い方と似たようなことになるわけです。コリント前書2章4節に、

「⁴わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力^{ちから}との証明によりたり。」(コリント前2・4)

とある。パウロは言葉を伝えているけれども、この言葉はそこの言葉とは違うぞと断言するために、

「神の国は言葉にあらず、力なり」

と彼は一生懸命で言っている。「デュナミス」(力)だ、霊だと言っている。だから、パウロをして言わせると、それは単なる言葉ではなくて、どこまでも霊であり力である。



●万の物これに由りて成る

ヨハネは、その後で何と言っているかというところ、ヨハネ伝1章2節、

²この言は太初に神とともにあり、

³万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。

「万の物これに由りて成り」と書いてある。「造った」と書いてない。「成る」という。

「万物がこの言によって成った」

という。「言は在った」という。「存在」「在る」とはドイツ語の「ザイン」、英語の「ビー」という字で、「成った」はドイツ語の「ゲヴォルデン」、英語の「ビカム」という字です。

存在から或るものが生じて来たという。生成したという。もちろん、「造る」という言い方も別にあります。「一切のものを彼が造った」という言い方が。けれども、この「成る」という言い方がまた特に含みがある。どういふことかというところ、非常に生命的な連関があるわけです。一種のメタモルフォーゼ、変形です。形が変わる。変形していく。ゲートが植物学で、

「すべて元は葉であつた。葉が花に成った。葉から花が出てきた。花が別にあつたのではない。葉が変形して花になった」

と言った。そういう、変形して生じたのは、生命の連関をもっているわけです。

「よろずのものはこのロゴスから成った」

という言い方は、生命の連関を非常に感ずるわけです。小さい子供が大人に成る。胎児が外界にあらわれてきて人と成る。みなこれは「成る」です。生まれる、生ずる、生成する。生成変形して展開していく。ダーウィンの進化論も多少これと関係しているでしょうね。

キリストの——ロゴス・キリストの、あるいはパトス・キリストの——無相の相たるところから、一相が無限相に展開していくわけです。無限の相に展開していく。まあ、不思議だよな、本当に。ただ自然に成るのではない。それは神の意志によつて成つていくんですけれども。正にそこに創造という意味が出てくる。

●生命の連関

「創造は、無から有になる。何も無いところから出てくる」

なんてなことをよく言うね。あの言い方はちよつと誤解されると困る。創造者というものは、「造る」と言うときには——あまり自然的なことはいいたくないけれども——生命の連関がなかったら、本来「成る」ことは無い。だから、「成る」と言うときには、やはり元がなければ成らない。キリストのあの奇蹟を見てごらん下さい。二匹のお魚と五つのパンから、みんなの者にやったでしょ。しかし、元はちゃんと二匹のお魚と五つのパンがあるんだ。それが五千人の者が食べても、まだ余りあるほどに成つてしまったという。これがその「成



って」しまったんだ。これがやはり驚くべき質の展開を、量の展開をするわけです。なぜかという、このロゴスというのは霊的存在者なんです。霊的存在者はその霊の力をもって万物を成らしめる。もともとそこに、元がある。いわゆる手品師が何かハトを出すようなのは違うんだ。これは、もともと、そういったものが成っていく。一即多とか、多即一とかいうのもみんなそうなんです。

● 霊生・靈光

4 之に生命あり、この生命は人の光なりき。

と。だんだん具体的に成ってきた。

「ロゴスに生命があった」

という。これは「言」と言ったつておかしなもんです。靈言者です。靈言者であるから、この靈言者は生命を持つている。これは霊的生命です。霊生をもっている。この霊生は相対的な光とか闇の世界よりも、もつと素晴らしい光の世界なんです。

「人の光なり」

というのは、闇の中でも光っているような光です。靈光です。本当はみんな霊の字が要るんだ。一々つけませんけれども。

そういう、神に対して在つて、神と一対一で居たところの、ロゴスは二にして一つなんです。これは面白いね、一対一は一(1…1…1)なんです。神対ロゴスは一なんだ。

我々は「光」と言うときには、もちろん太陽の光を思い出す。人間は仕方がないよ、太陽の光でもつて光を知ったんだから。お天道さんがなければ、人間というのはどうにもならないんだよ、自然的存在としては。けれども、

「²³ 都は日月の照すを要せず、神の栄光これを照し、^{こひつじ} 羔羊はその燈火なり。」(ヨ

ハネ黙示録21・23)

とある。黙示録になると、この靈光は、キリストはそういう絶対的な光なんだ。だから、キリストの中に祈り入ると、凄い光の中に入る。凄い生命の中に入る。いやあもう、そういう次元だったら、限らないですよ。それも、人を審くのではない。愛するんです。だから、私は「元始にロゴスあり」よりも、「元始にパトスあり」と言いたいんです、日本人としては。言葉の世界で「さあ、これはどういう意味だ」とか、その言葉をもつて一生懸命で言葉の詮索をしてたら大変だ。

「儀文は殺し、霊は生かす」

とパウロが言ったとおり。聖書の読み方が

「これはこういう意味だ、ああいう意味だ、いや、そうじゃない、こうじゃない」なんて、言葉に捕らわれた言葉だったらしょうがない。

「そんな言葉ではないんだ。力だ、生命だ」



とパウロは言っている。だから、ヨハネもここで、

「生命だぞ、光だぞ」

と言っているんです。「言」なんて言っても、これは「生命だ、光だ」と。

●エン・クリスト

それで、生命であり光である、その実体が現れてくる。とにかく、地上のキリスト以前の天界の「ロゴス・クリストス」という存在が、そのような素晴らしい霊的具體性をもった実在であるということです。キリストはまたそこへ帰ってしまった。天界へ行ってしまった。そして、その実在者が今度は聖霊を降だした。人間を救うためにやっていらつしやった。十字架の救いと復活の生命を現した。ナザレのイエスに現れたのはもともと、生命だからね。十字架で仆れてお終いなんていうキリストではない。十字架に懸かって、それから甦ったといつても、息を吹き返したのではない。霊体として、もともとのロゴス・キリストの同質なものが現れてきたんだ。大変なものです、これは。今もお天界に、霊界におられる。いつなりとも、そのキリストの中に私たちは祈り入ることができる。そうでしょ。だから、「エン・クリスト」と言っているんです。ヨハネ伝1章1節から4節の、この無相の相なるところの、ロゴス・キリストに――パトス・キリスト、エトス・キリストと言ったつていい――この大愛なるキリストの中に祈り入ると、「何が来ても、どうなつても」ということになります。大丈夫です。

いろいろな事が今年は起きるでしょうね。いいですよ。それが起きれば起きるほど、逆にこの世界に入って強くなつてください。そして、この世界がいかに本ものであるかということを体験し、そして体現してください。なるほど、キリストの直弟子の福音というのも、そんな次元の世界だったかと。

「始めにロゴス在り」というこのロゴスは、そういう凄い言葉ですから、いわゆる「言」という日本語にこだわらないでください。ギリシア語、ヘブライ語の奥の、神の根源語とというのが本当の言葉なんだから。それは異言の世界だ。

「始めに異言在り」

と言ったつていい。異言は霊言だから。それはギリシア語でもヘブライ語でもない。神の根源語、「ウル・ヴォルト」だ。もの凄い霊的な力をもっているパトスだ。一切を救いあげるぞと。いいですか、この福音を得たら、皆さんは本当に力強い人になるから。絶対にへこたれません。そして、何が来ても、

「ああ、気の毒な人だ。こっちが祈つてあげましょう、救つてあげましょう」

というわけだ。妬みも争いも何もいらん。そういう大愛、霊愛の世界だ。大道の世界、大義の世界です。ヨハネ伝1章1節というのは、それほどのもの凄い内容が隠されていました。私は正直、「始めにパトスあり」と言いたいね。

